

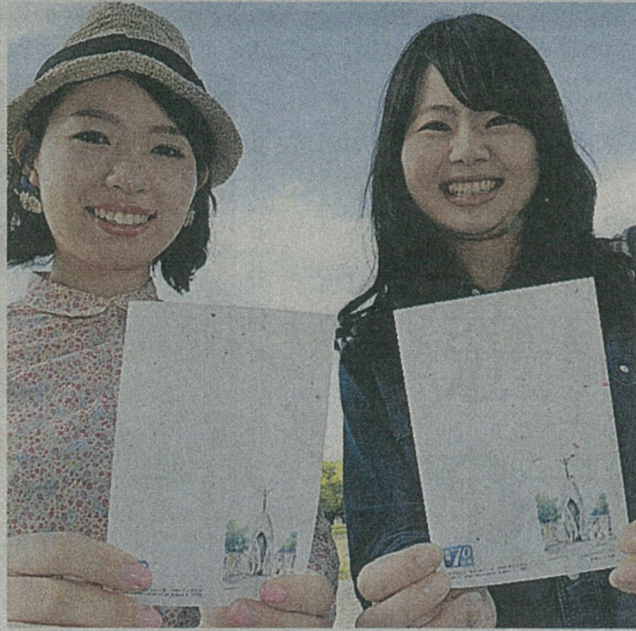
平和の折り鶴 はがきに再生

広島市、資料館で配布 3種130万枚

広島市は、広島平和記念資料館に来館した人に、平和記念公園の折り鶴を再生した紙で作ったポストカードを配布している。4月から始めた取り組みで、市の担当者は「平和への願いを広めるため、このカードで誰かに手紙を書いてほしい」と話している。

平和への願いを込めて平和記念公園に捧げられ、原爆の子の像につるされ

広島平和記念資料館を訪れ、ポストカードを受け取った川上真奈さん(右)と新出(しんで)真子さん



る折り鶴は年間約1千万羽以上。イラストレーターが描いた原爆死没者慰霊碑、原爆ドーム、原爆の子の像の3種類のカードを計

130万枚つくる見込みで、来館者に1人1枚配布する。

友人と2人で訪れた兵庫県宝塚市の会社員、川上真奈さん(24)は「小学校のころ、広島市に折り鶴を寄贈したことがある。それが自分の手元に戻ってきたようでうれしい」と話した。

(山田健悟)

障害者施設が色の選別協力



「すまいる☆スタジオ」では、色とりどりの千羽鶴を選別していた=広島市中区大手町

ポストカード作りには市内約30の障害者就労施設が関わっている。

「トカーブ、カーブ、カーブ広島……」。広島市中央区大手町の「すまいる☆スタジオ」。2階の作業スペース

ースで、男女4人が広島カーブの応援歌などを口ずさみ、再生紙に利用する折り鶴の選別をしていた。糸でつながった折り鶴を一羽ずつ取り外し、黄緑や薄いピンクなどの優しい色

合いのものをかごの中に入れていく。柄ものや色の濃い折り紙を再生紙にするど、色合いが濃くなり、ノートやポストカードに適さなくなるためだという。

この事業所には、現在、ダウン症や自閉症、まひなどの障害がある10代後半から50代までの17人が通っている。社会に出て働きたいと思いつつも、病気の再発や仕事のストレスとの葛藤に悩む人たちが多い。この場で作業し、社会に出て働くための準備をしているという。折り鶴の選別もその一環だ。

今年2月から通う川端弘子さん(47)は折り鶴を仕分けの手を休め、「仕事をする時は今でも緊張する。でも、友だちがたくさんできて楽しい」と話す。

施設のサービス責任者、金子智範さん(43)は「障害のある人もない人も、働くことを通じて共存できる社会。それも一つの平和の形ではないでしょうか。カードをきっかけに、障害者の小さな世界を知ってほしい」と願っている。

(山田健悟)